17　次の文章は、の短編小説「麦をむ」の後半である。三年前に一人息子を病気で失い、それ以来妻の香津子と別居している京治は、大学時代の親友の川西良一の十三回忌に招かれて新潟県長岡市に来ていた。その夜、眠れない京治は、堤沿いの高台に座り、無理に封じ込めていた記憶をよみがえらせる。これを読んで、後の問いに答えよ。　〈宮城教育大〉二〇二一年度出題

　二人が結婚をして六年目に、香津子が妊娠していることがわかった。思わぬ吉報だった。結婚当初から子供が欲しかった二人は、いつまでも妊娠の兆候がないので、それぞれが病院に相談に出かけたこともあった。子宝に恵まれるという神社や温泉にも出かけた。半ばあきらめかけていた時のせに、二人は手を取り合って喜んだ。男児が誕生した。目が大きく、やがて笑うようになると、笑顔が特別く思えた。京治は、夜のつき合いをやめ、息子の顔を見るためにっぐ帰宅した。自分を見つめる息子のあどけない表情がまぶしかった。ａ玉のような、という表現が、その時、初めて京治は実感できた。

　「野球をやってくれるかな？」

　「そうね。あなたとキャッチボールをする日が来ればいいわね」

　会社はすでに不況の波をにり、多額の負債を抱え、リストラがはじまっていたが、京治は孤〔　　ｂ　　〕奮闘して働いた。すべては英治の将来のためだった。息子の表情に未来を想像するようになった。

　英治がよちよち歩きができるようになった時、京治は初めて息子の手に野球のボールを握らせた。

　英治の病気が発覚したのは、その直後であった。二ヵ月近く前から、香津子は英治の異変に気付いていたが、それが病気のせいだとは思っていなかった。街のちいさな病院からすぐに大学病院に行くように言われ、担当医師から英治の病気が難病であることを告げられた。京治も病院に呼ばれ、若い担当医師の病理説明に目の前が暗くなった。

　「これからは紫外線に肌を当てることは一切できないと考えて下さい」

　冷静な口調で、その病気を患った小児の生存率や将来のことを言われただけに、京治のショックは並大抵なものではなかった。香津子の動揺は京治以上だった。劣性遺伝による極めて特異な病気と言われても納得いくはずがなかった。

　病院のベッドで自分がどうして入院しているのかもわからず、不安を隠し切れないでいる英治がに思えた。英治が退院し、家に戻ってきた日から、一家の生活はがらりと変わった。難病は息子から青空を奪った。生きている限り青空を見ることができなかった。昼間から部屋のカーテンを閉め、夜だけが親子の外出の時間になった。英治に病気を理解させることも大切な課題だった。京治は大病院を訪ね歩いて、息子の回復の望みを探し求めた。医師たちの話を聞けば聞くほどたる気持ちになった。

　―なぜ英治に病魔が牙をいたのだ……。

　京治は己に至らぬ所があったのではと自分を責めた。それは香津子も同じだった。

　二人を救ったのは、英治の頑張りだった。幼子の奮闘する姿に京治と香津子は沈んでいた気持ちを前向きに変えた。

　学校へ進学することがわず、個人教授を頼んで勉強させた。英治はすべての学科に対して驚くほど理解力が高かった。読書が好きで、やがて宇宙物理学に興味を持ちはじめた。

　時折、昼間、外界に触れられないことへのちが募り、不機嫌になる時もあったが、親の目から見ても英治はよく耐えていた。

　「あの子は何もかもわかっているのよ。だから病気のことを口にしないし、私たちにさえ当たることがないんだと思うわ」

　夜の散歩で息子の宇宙の話がはじまった。

　九歳の誕生日を迎えた日、三人だけのささやかなバースデー・パーティーの席で、英治がいた。

　「僕は何歳まで生きられるの？」

　「ずっと生きられるわ。ママとずっと生きましょうね」

　Ａ香津子の言葉を聞いて、京治は息子に何かをさせようと思った。それが何なのかわからなかった。

　答えは、一ヵ月後、英治の口から出た。

　「パパは僕と同じの時は野球に夢中だったんだってね。パパ、僕に野球を教えて」

　「ああ、いいよ」

　京治は翌日、英治にユニホームと帽子、スパイク……、そしてグローブとボールを買って帰った。

　それを見て香津子は逆上した。

　「そんないことはやめて。英治はグラウンドには出られないのよ」

　「そんなことはないさ」

　家の中でユニホームを着て喜んでいる息子の姿を見て、京治は胸が熱くなった。

　―この子と一緒にキャッチボールをやろう。

　京治は家の近所でキャッチボールができそうな場所を探したが、どこも暗過ぎて適当な広場がなかった。

　京治は会社の同僚や学生時代の友人に連絡し、ナイター設備のあるグラウンドを探した。親子二人のキャッチボールのために一晩グラウンドを貸してくれる球場はなかなか見つからなかった。ようやく見つけたのがにある倒産した土木会社のグラウンドで、一晩だけ照明をけられるということだった。京治は、そのことを香津子に話した。香津子は反対した。それでも京治は英治を連れて、秩父へ行くつもりでいた。

　不機嫌な香津子とユニホームを着た英治をワゴン車に乗せて、が落ちた東京を出た。秩父に着いたときには、夜の九時を過ぎていた。グラウンドはすぐにわかった。そこにだけ照明灯が光っていた。グラウンドに車を横付けすると、荒廃したグラウンドの外野にびついたブルドーザーが置きっ放しだった。照明灯も灯りがっているのはライト後方だけだった。それでも車から降りた英治は大きな声を上げてグラウンドにむかって走り出した。

　「英治君、走っちゃだめ。転ぶわよ」

　〔　　ｃ　　〕切り声を上げて、香津子が後を追った。

　京治は素早くユニホームに着換えて、グラウンドに入った。夫のユニホーム姿を見て、香津子が目を見開いていた。英治がまぶしそうな目で京治を見上げた。

　「英治、まずはグラウンドを一周歩こうか」

　無理をさせないでね、背後で香津子の声がした。京治は息子の手を引いて、ホームベースに立ってから、ゆっくりと左翼の方にむかって歩き出した。草の匂いを含んだ風が二人に吹いていた。

　「パパ、これって何の匂い？」

　「野球場の匂いだよ」

　「ふうん」

　英治はのように鼻を突き出し、京治に笑い返した。二人は外野の朽ちたフェンス沿いを右翼のカクテル光線にむかって歩いた。

　「野球場って大きいんだね」

　「もっと大きな野球場だってあるぞ。次はそこで一緒に野球をしよう」

　「うん」

　京治の顔を見上げた英治が足元のに引っかかって前のめりに倒れた。あっ、と京治は声を出し、抱き起こそうとした。その前に英治が立ち上がった。両手が泥だらけだった。

　「大丈夫か」

　「うん、平気だよ」

　英治は両手を胸の前でひろげ、泥に汚れた手をどうしたものかという顔をしていた。京治はしゃがみ込んで、足元の泥をり取って、自分のユニホームをくようにして泥を拭いて笑った。それを見て英治が同じ仕草をした。

　二人はカクテル光線の下でキャッチボールをはじめた。驚いたことに顔にむかって飛んできたボールを英治は怖がりもせずにグローブで受け止めた。無理をしているのがわかった。家の中でキャッチボールを教えた時のことを覚えていて、実行しようとしているのだろう。でもそれは少年がキャッチボールを体得するために覚えなくてはいけないことだった。

　「英治、いな」

　「うん。怖くなんかないよ、僕。昼間一人で練習をしてたんだ」

　「……そうか」

　息子が精一杯投げてくるボールは九歳の少年にしては力がなさすぎた。京治は目頭が熱くなった。

　―これでいいんだ。Ｂこれがキャッチボールなんだ……。

　京治は胸の中でつぶやき、ボールを息子にむかって投げ返した。加減をし過ぎたボールは手元が狂ってワンバウンドし、英治の後方にれた。背後の朽ちた金網からボールが飛び出し闇の中に消えた。

　「あっ、いいよ。パパが取りに行くから」

　先に英治が走り出していた。

　京治もすぐに追い駆けた。金網の外は盛り上がったのむこうに麦畑がひろがっていた。ボールはそこに入ったようだった。

　「危ないから、そこにいなさい」

　京治が一人で麦畑に入っていくと、英治がついてきた。

　「あった」

　英治の声がして、振りむくとボールを手に息子が笑っていた。京治も笑ってうなずいた。

　英治が鼻を鳴らすようにして、野球場の匂いだね、と言った。

　見回すと、月明りに実った麦の穂が風に揺れていた。

　京治は麦の穂を右手で握りしめ、手の中に残った麦のひとつを口の中に入れて嚙んだ。英治は、小首をかしげて京治を見上げ、ボールを握ったちいさな指を京治の手の上に持ってきた。京治はボールを取って、その手に麦をひとつ載せた。英治は、それを指先でつまんで口の中に放り込んで、前歯で嚙むようにした。

　「苦いね」

　「そうだな、少し苦いな」

　「少し苦いな」

　息子は父親の言葉をて言った。

　その夜から、二ヵ月後に英治は病院のベッドで静かに息を引き取った。

　英治が死んでからしばらくして、入院前の早朝、ユニホームを着て歩いていた少年を何度か見かけたというが立った。それが英治なのかどうかはわからなかった。ただ一度だけ、香津子に英治が青空の下の野球場を見に行きたい、と言い出したことは、妻から聞いて京治も知っていた。

　香津子は京治が野球をさせたことが、英治を死に追いやった、と信じ込んだ。

　もし青空の下にユニホームで出て行ったのなら、息子を死なせたのは、たしかに自分なのだろう、と京治は思う。

　ただ野球を教えてやれたことは間違いではない気がする。それがエゴと言うのなら、エゴと呼ばれても仕方ない。

　―俺は何かを伝えてやりたかった。Ｃあの子は何かを知りたがっていた……。

　京治はぽつぽつと歩き続け、視界の中に川西家の裏門が見えたのをたしかめると、そこで急に立ち止まった。

　誰かの声がしたような気がした。

　振りむくと、ただ麦の穂がざわざわと音を立てているだけだった。

（注）　○劣性遺伝＝遺伝形式のうち、形質があらわれにくいもの。

○カクテル光線＝異なる色、温度の光源を組み合わせて、昼光色に近い照明効果を出す光線。

○川西家＝京治が現在滞在している友人の実家。

問１　波線の部分ａの語の意味として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　もろく繊細で壊れやすい　　イ　輝くように美しくて貴い

ウ　丸くなめらかで心地よい　　エ　価値が特に高くて珍しい

オ　あどけなくて可愛らしい

問２　空欄ｂ・ｃに入る漢字一文字を、それぞれ記せ。

◎問３　傍線の部分Ａで、なぜ京治は「香津子の言葉を聞いて」「息子に何かをさせようと思った」のか。息子の生き方についての京治と香津子の考え方の違いにふれて、九〇字以内（句読点を含む）で説明せよ。

問４　傍線の部分Ｂに「これがキャッチボール」とあるが、「これ」とは何か。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　顔に向かってボールが飛んできても、決して怖がらずに受け止めるようにしてボールのやり取りをすること。

イ　練習した通りに実行することが技を体得するために必要と理解したうえで、ボールのやり取りをすること。

ウ　精一杯力を込めてボールを投げるだけでなく、相手と楽しく会話しながらボールのやり取りをすること。

エ　力の差があっても、相手とボールのやり取りを続けたいという思いを込めてボールのやり取りをすること。

オ　力がなくても練習でそれを補い、自分の力を精一杯引き出すようにしながらボールのやり取りをすること。

◎問５　傍線の部分Ｃに「あの子は何かを知りたがっていた」とあるが、本文中に描かれた英治のいくつかの行動から、英治は何を知りたがっていたと考えられるか。簡潔に記せ。

問６　この小説の題名が「麦を嚙む」であることには、どのような意味があると考えられるか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　息子を失ったというつらく苦い思い出を嚙みしめて生きていくことが人生であり、息子の死の意味を考え続けなければならないという覚悟が題名に込められている。

イ　息子の死を考えることは麦を嚙むようにつらいことだったが、じっくりと向き合ってみると自分の行動は間違っていなかったという気づきが題名に込められている。

ウ　麦の苦さに象徴されるように、野球は息子にとって身の丈に合わないものだったが、息子に野球を教えたことは間違いではなかったという考えが題名に込められている。

エ　苦い麦を嚙んだことが災いしたかのように、野球は息子の命を奪ったが、自分がしたいと思うことをすることができて良かったのだという認識が題名に込められている。

オ　苦い麦を嚙むような実体験をすることこそが生きることであり、息子にそのような体験の機会を与えたことは間違いではなかったという思いが題名に込められている。

【解答と採点基準】

問１　イ

問２　ｂ＝軍　　ｃ＝金

問３　Ａ香津子は息子が安全な環境で守られて生きることを望んでいたが、Ｂ母と生きるという閉塞的な言葉から、Ｃ息子には外界と接して経験を積む中で成長してほしいと考えていることに京治が気付いたから。（90字）

Ａ・Ｃがなければ全体０。文末が理由説明でなければ減点２。

Ａ＝３〔息子英治の延命のみを願う香津子の考え方に触れていることは必須。〕

Ｂ＝２〔香津子の考え方に対し、京治は積極的に賛同できず、違和感を持っていることを明示できていれば可。〕

Ｃ＝５〔息子英治の成長や人生の充実感に触れていることが必須。守られた生活ではなく、自ら外の世界、未知の世界に出て行く経験という要素がなければ、減点３。〕

問４　オ

問５　Ａ父親の体験したようなＢ外の世界と、そこで得られるＣ生の実感。

ＢあるいはＣがなければ全体０。

Ａ＝２〔父親の京治が経験した野球に自分も打ち込みたいという要素があれば可。〕

Ｂ＝４〔自分が生活している世界から飛び出した外部の広い世界に触れていることが必須。〕

Ｃ＝４〔生きることの喜び、身体で感じる生きることの充実感、などでも可。〕

問６　オ